受領No. 1612

芸術活動における「ものの見方」スキルの実態解明及びその実証研究

代表研究者　村中さくら　（金沢大学大学院人間社会環境研究科　博士前期課程）
共同研究者　金間　大介　（金沢大学融合研究域融合科学系　教授）
三浦　賢治　（金沢美術工芸大学油画専攻　教授）

Examining artist's perspective skills on their creative process and performance

Representative　Sakura Muranaka (Master course, Kanazawa University, Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies)
Collaborator　Daisuke Kanama (Professor of Faculty of Transdisciplinary Sciences, Kanazawa University)
Kenji Miura (Professor of Oil Painting, Kanazawa Collage of Art)

研究概要

芸術家が創造的な作品を生み出すのに重要なスキルの一つとして「ものの見方」がある。これは、対象を深く観察することで、自分自身が何を感じ、何を見出すのかということを徹底的に追究することとされる。このことから「ものの見方」は、単に写実的な絵を描く能力ではなく、創造的な成果につながる特別なスキルと考えられる。当然、多くの美術系大学では入学後初期の授業から、綺麗な線を引く、色を塗り重ねる等の一般的に必要とされる絵画のスキルの習得も徹底される。このような絵画のスキルと「ものの見方」の双方が、創造的な作品を生み出す両輪のスキルとなる。しかし、絵画のスキルはある程度、明確化され、教育や人材育成に展開されている一方で、「ものの見方」の実態は依然として曖昧なままある。そこで本研究では、芸術活動における「ものの見方」の実態を明らかにし、創造的活動に必要とされる新たなスキルの発見・解明を試みる。さらに、得られた知見をもとに「ものの見方」の産業界への応用可能性を検討する。これにより、企業のイノベーション活動における、創造的パフォーマンスを発揮する人材の育成、並びにそのマネジメント手法の開発に貢献する。